

# 山口県立大学 郷土文学資料センターだより

## 嘉村礒多生誕百二十年記念行事

多田美千代（「礒多を読む会」代表）

嘉村礒多生誕百二十年に因む行事について、はじめに時を追ってまとめてみたいと思います。

- ・平成29年8月  
感想文集『安倍能成に宛てた礒多の書簡』発行  
発行 「礒多を読む会」
- ・平成29年10月14日（土）10時～11時30分  
講演「山口県立大学所蔵の嘉村礒多資料を見る」  
講師 加藤禎行研究員  
主催 山口県立大学郷土文学資料センター
- ・平成29年11月3日（金）  
文学散歩（山口県立大学「桜の森アカデミー」やまぐち学  
における講座）  
講師 多田美千代  
主催 山口県立大学
- ・平成29年11月25日（土）  
文学散歩「やまぐちの文学を辿る文学散歩」（「仁保の里」  
集合。バスで生家へ。嘉村作品の原風景を辿りつつ。）  
主催 山口県文化振興課
- ・平成29年11月25日（土）13時～  
「礒多忌」84回忌（於礒多生家「帰郷庵」）  
主催 「礒多を読む会」

以上、一連の行事をふりかえり、「礒多を読む会」としても各関係筋からのお働きを頂き、感謝に堪えないところです。

「生誕百二十年祭」開催の話が持ち上がった当初は僅か十名そこそこの会で何が出来るか、と不安でしたが、礒多生家の会による「植樹祭」が行われる運びとなり、これに関連する行事として勢いを得、早速プログラム作成、ポスター、チラシの手作りを急ぎました。

そこへ末永宗弘先生よりお茶席のご提案をいただき更なる励みとなりました。お茶席は先生のお弟子さん、同門の方々及び仁保地域の茶道クラブのご奉仕で前日から御園棚の設置等正式な設えとなり、前面には県文化振興課作成の「嘉村礒多一故郷への思い」と題してカラーパネルの展示、一方では県立大学郷土文学資料センター所蔵の礒多の直筆原稿「彼に帰った彼女」の写しが展示される等、お茶席コーナーの盛況はメイン会場への見事なアプローチとなりました。会場正面ステージ左の礒多の写真にはお献茶、右側には礒多ご両親の写真を掲げ、十四時から「読む会」による生誕百二十年祭スタート。会場はほぼ満席となりました。

- ・平成29年11月吉日  
『嘉村礒多の妻静子・チトセー嘉村礒多ノートⅢ』出版  
著者 多田美千代
- ・平成29年12月3日（日）13時～  
生誕百二十年記念植樹祭（於帰郷庵）  
主催 礒多生家の会
- ・平成29年12月3日（日）14時～15時30分  
生誕百二十年記念祭（於仁保地域交流センター）  
主催 「礒多を読む会」
- ・平成30年1月28日、2月11日、  
3月4日（各日曜日）10時～  
連続講演一生誕120年+1年・嘉村礒多を味読する  
第1回 「業苦」を読む 中原豊先生  
第2回 「七月二十二日の夜」を読む 加藤禎行研究員  
第3回 「不幸な夫婦」を読む 多田美千代  
主催 山口県ひとづくり財団



嘉村礒多 生誕120周年記念 祭壇（写真撮影：久保紀夫氏）



# 帰郷庵にて嘉村礒多生誕 120 周年記念 植樹式典を開催

松田政好（嘉村礒多生家の会 事務局長）

私小説家嘉村礒多は、明治30（1897）年12月15日、現在の山口市仁保上郷にて生まれ、平成29（2017）年12月で生誕120年を迎えることとなりました。

「嘉村礒多生家の会」では、それを記念して平成29年12月3日（日）に山口市長代理 ふるさと創生部古賀信幸参事や、やまぐち文学回廊構想推進協議会福田百合子会長ほか、多数の来賓の方々をお迎えして、礒多の生家である「帰郷庵」にて嘉村礒多生誕120周年記念植樹式典を執り行いました。植樹では、古賀信幸参事と「礒多を読む会」多田美千代代表と「嘉村礒多生家の会」川尻雅男会長によりシャクナゲの花木が植えられました。

また、仁保地域交流センターでは、アトラクションとして「礒多を読む会」によるお茶会や礒多の作品「上ヶ山の里」などの朗読等が行われました。

「嘉村礒多生家の会」は、平成22年に仁保自治会で設立され、平成23年に「帰郷庵」の指定管理者となり現在に至っています。嘉村礒多顕彰会が平成28年に解散されましたが、「生家の会」では、「帰郷庵」において礒多の文学の顕彰と地域活性化の施設としての事業も行っています。

この「帰郷庵」は、築後130年を経過していますが、無人となっていた生家を平成16年に仁保自治会と嘉村礒多顕彰会とで生家保存の署名活動を行い、約12,000人の署名を得て山口市に陳情を行いました。平成20年には嘉村家の御親族より山口市が寄贈を受け、平成22年11月に礒多の生家を保存し、昔の自然豊かな農家が行っていた薪でかまどを炊いたり、また五右衛門風呂や囲炉裏などの田舎暮らしが体験できる古民家としてよみがえり「帰郷庵」と命名されました。年間約2,500人の来場者があり、うち古民家体験の宿泊者数は約500人程度の利用があります。皆さんもぜひ一度古民家での生活を体験してみてください。



「嘉村礒多生家の会」川尻雅男会長による記念式典でのあいさつ



嘉村礒多の生家である「帰郷庵」



山口市古賀参事と「礒多を読む会」多田代表と川尻会長による植樹



# 「磯多を読む会」による顕彰

中西 祐 介（磯多を読む会）

平成29年12月3日に嘉村磯多生誕120周祭が開催された。

私も主催である「磯多を読む会」のメンバーとして参加した。

アトラクションの内容は、多田先生を中心に読む会のメンバーで何度も話し合いを重ね、それぞれがなるべくステージに立ち、できることをしようということになった。テーマは「磯多のふるさと」。

司会進行は会の中心として沖野さんがつとめ、開幕は小谷さんの力強い謡曲「老松」でスタート。松の木は磯多作品において何度も象徴的に使われるモチーフでもある。

続いて、多田先生による、磯多が嘉村家にとって待望の長男であったことなど、生誕と幼少期や仁保とのとのつながりについての紹介。

引き続き伊藤さんによる朗読「晩秋雑感」(随想)で磯多の読書歴について触れ、栗田さんによる「伊藤君とフジとに」(随想)では、故郷の交友関係について懐かしむ様子を偲ぶ。

私の「歌(ギター演奏)とお話 ～磯多を思って～」では、磯多をテーマに作詞作曲し、3曲を披露した。アップテンポな「知ったこっちゃない」は私の磯多への思いを曲にした。

「息」という曲は磯多の代表作である小説「業苦」のラストシーンを切り取ったバラード。

最後の「書簡」は、磯多が安倍能成へ宛てた手紙をぎゅっと1曲にまとめてみた。最も時間がかかったのはこの曲で、何度も歌詞を書き換えた。その甲斐あってか、多田先生に褒めて頂いたのも「書簡」という曲であった。その後、ゲスト出演の山本さんのハーモニカで前半終了。

休憩を挟み後半は、末富さんと渡辺さんによる朗読「上ヶ山の里」。仁保とのつながりが最も強い随想。「異郷の土にこの骨を埋めてはならない」は磯多と故郷を語る上で外せない一文である。

地元の岡さんの迫力ある吟詠と大来さんの「秋立つまで」の落ち着いた朗読は、見事な締め括りとなった。

最後にもう一度山本さんのハーモニカに合わせて「ふるさと」を会場の皆さんと合唱して、アトラクションは無事に終了。「磯多を読む会」のメンバー全員がホッとした瞬間でもあった。

私が磯多のイベントに主催側として関わるのは、今回が初めてだったため、幾つか反省する点はあったが、来て頂いた方々には概ね好評だったようでありました。

今後もより深く、磯多や仁保と関わることができればと考えている。



朗読「伊藤君とフジとに」栗田志代子氏〈写真撮影：久保紀夫氏〉



裏千家 末永先生(右から二人目)とお茶会の皆さん〈写真撮影：久保紀夫氏〉



# ふるさとに帰ってきた山頭火

西田 稔 (山頭火ふるさと館 館長)

昨年10月7日、防府市民の長年の願いであり、また全国の山頭火ファンの皆さんの熱い思いであった山頭火顕彰記念館が、「山頭火ふるさと館」として防府天満宮そばにオープンいたしました。

山頭火ふるさと館は、防府天満宮大鳥居の横にあるまちの駅「うめてらす」から歩いて1分、隣には兄部家本陣跡が位置し、北側に旧山陽道、南側には山頭火の小径（山頭火の生家跡と母校松崎小を結ぶ道）が通る場所に建っています。

大正5年、山頭火35歳の時、山頭火は妻子を連れてふるさと防府を逃げるように去っていきます。その後山頭火は妻サキノとも別れ、防府に居を構えることはなく、孤高行乞の旅を続け、松山の一草庵で死ぬまで句を作り続けます。その数は8万句ともいわれており、その中にはふるさとを想う句も数多く残しています。

「雨降るふるさとははだしであるく」「ふるさとの水のみ水をあび」「ふるさとの学校のからたちの花」「海よ海よふるさとの海の青さよ」「寝るところが見つからないふるさとの空」「うまれた家はあとかたもないほうたる」……ずっとふるさとを想い続け、ふるさとに帰りたかったであろう山頭火、その山頭火の顕彰記念館がやっとふるさと防府に完成しました。山頭火もきっと喜んでいるにちがいません。

実際、山頭火ふるさと館オープン当日には、こんなことがありました。この日の天気予報は快晴だったにもかかわらず、オープンセレモニー前に急に大粒の雨が降り出し、会場を濡らしました。その間わずか数分。その後すぐに真っ青な空が広がり、見事な秋晴れの下、オープンセレモニーは無事終了しました。会場を濡らしたあの雨は、100年ぶりにふるさとに帰ってきた山頭火の流した喜びの涙であったのではないかと思います。

現在、本館が所蔵する資料は書籍も含めて総数2255点で、山頭火直筆の短冊や掛け軸、葉書きの他、尾崎放哉、萩原井泉水、久保白船、河東碧梧桐らの直筆の作品等、全国に散在していた山頭火や自由律俳句に関する貴重な資料が今も徐々に集まりつつあります。



山頭火ふるさと館の全景



山頭火の母校の児童とともにテープカット

漂泊の俳人として、孤独を耐え抜き、厳しい人生を歩んだ山頭火の精神力の強さ、そしてそのような人生を歩んだからこそできた人の心を打つ句の数々、それらには、私たちが生きる上で共感できる部分や、力を与えてくれる何かが隠れています。

オープン以来、今年2月3日には入館者が1万人を超えました。今後もさらに多くの皆様に、山口県が生んだ昭和の偉大な俳人種田山頭火の魅力をふるさとから全国へ、そしてまた後世にもしっかり伝えていきたいと思っています。

ぜひ一度、ふるさと館へお越しください。多くの皆様のご来館をお待ちしています。



# 「心中天網島」と岩国

菱岡憲司（センター研究員）

2017年4月に山口県立大学国際文化学部にて赴任しました菱岡憲司と申します。専門は日本近世文学で、大学では日本文化論（近世文学）を担当します。

篠田正浩監督の映画「心中天網島」では、岩国の錦帯橋がしばしば登場し、あのうつくしい橋の形状が、見事な舞台装置として機能して、鮮烈な印象を残しています。しかし、近松門左衛門の浄瑠璃「心中天網島」の舞台は、もちろん大阪。岩国の錦帯橋が登場するはずはありません。監督は錦帯橋のうつくしさに魅入られたため、場所の錯誤を無視してでも画面に収めたかったのでしょうか。

しかしじつは、錦帯橋のある「岩国」には、まったく縁がないわけではないのです。といいますのも「心中天網島」の主人公は紙屋治兵衛。そして、治兵衛の妻おさんが「女の義理」で金を用意するとき、店の一時金を流用するのですが、そのとき「岩国の紙の仕切金」云々と発言するのです。紙屋治兵衛は商売柄、岩国から紙を仕入れていたわけですから。

2017年夏、岩国市の博物館・岩国徴古館では、「紙から見える江戸時代の岩国」と銘打った企画展を行っていたため、学生を引率しつつ見学に赴きました。江戸時代の岩国特産品「岩国紙」について、製造の様子や流通過程を、当時の資料にもとづいて展示しており、岩国がいかに日本でも有数の紙の産地であったかをつぶさに知ることができました。現在、山口の和紙といえば徳地和紙が知られていますが、江戸時代では、岩国紙が圧倒的な知名度を誇っていたのです。当時、大阪の紙屋では、ごく日常的に「岩国の紙の仕切金」といった言葉が行き交っていたことでしょう。

篠田正浩監督が、どこまで岩国紙のことを踏まえていたのかわかりませんが、一見、無関係に思える錦帯橋の映像でも、少し気にして調べてみると、岩国紙という、歴史的背景をもつ郷土の特産品へとつながります。同様に、郷土の歴史をひもとくヒントは、我々の日常の身の回りにもあふれております。ただ、その気づきを、思いつき以上のたしかなものとするためには、文献資料に拠る必要があります。

郷土文学資料センターでは、これからも、山口の文学と歴史のたしかな歩みを伝える、資料の保存と活用につとめたいと考えています。



提供：岩国市観光振興課



提供：岩国市観光振興課

## 寄贈図書（2017年8月～2018年2月）

岡村清子『句集 遍路杖』、江島その美『ふうわり』『水に抱かれて』、黒岩淳『連歌の息吹-つながり、ひろがる現代の連歌-』『連歌と国語教育-座の文学の魅力とその可能性-』、柿村きよ美『詩句集 卒寿の春』（『柿村きよ美句集 稿本』）、其桃発行所『合同句集「桃影」第十二輯』、多田みちよ『嘉村礒多ノートⅢ 礒多の妻 静子チトセ』、浜崎勢津子『訪ひ人』、豊北郷土文化友の会『ふるさと豊北の伝説と昔話 第四集』、山口川柳吟社『山口川柳吟社百年史』

## 寄贈雑誌（2017年8月～2018年2月）

『'17現代山口県詩選』第54号（山口県詩人懇話会）、『あらつち』第712～715号（あらつち社）、『其桃』第873～878号（『其桃』発行所）、『すばる』VOL.52（すばる俳句会）、『中原中也研究』第22号（中原中也記念館）、『燔祭』第7号（「燔祭」の会）、『颯』第106号（颯文学会）、『風響樹』第49号（風響樹同人）、『文芸山口』第335号～337号（山口県文芸懇話会）、『やまなみ』第34号（やまなみの会）、『山彦』第141～144号（山彦発行所）

## 編集後記

▼『郷土文学資料センターだより』30号をお届けします。本号は、嘉村礒多生誕百二十年を記念して、「礒多を読む会」代表の多田美千代氏に「嘉村礒多生誕百二十年記念行事」、「嘉村礒多生家の会」事務局長の松田政好氏に「帰郷庵にて嘉村礒多生誕120周年記念植樹式典を開催」、「礒多を読む会」の中西祐介氏に「『礒多を読む会』による顕彰」をご寄稿いただきました。また、昨年山頭火ふるさと館が開館したことを記念して、館長の西田稔氏に「ふるさとに帰ってきた山頭火」をお寄せいただきました。▼本センター設立当初から長きにわたり運営協議会委員としてご協力いただき、嘉村礒多や種田山頭火と同時代を生きた和田健氏の姿が礒多生誕百二十年記念式典や山頭火ふるさと館開館記念式典にないのを寂しく感じているのは、わたくしだけでしょうか。和田先生がご存命であれば、礒多や山頭火について、どのような内容の原稿をご寄稿いけただかかと、思いを馳せているところです。▼1月28日（日）に「鷲流狂言 in 山口県立大学」（第10回）を開催しました。山口鷲流狂言保存会の全面的なご協力のもと、狂言の上演とともに、当センター所蔵の関係資料の展示や演目の解説を行っており、地域の方々から好評をいただいております。10回を節目に、いったん幕引きとなりました。保存会の皆様をはじめ、多くの方々のご協力に感謝申し上げます。10年のあゆみは、次号に掲載予定です。▼本号も発行が遅れに遅れてしまいました。これはひとえにわたくしの不手際によるものです。次号から、今年度本学に着任し、着任の挨拶を兼ねて「『心中天網島』と岩国」を執筆した菱岡憲司研究員が編集を担当いたします。今後ともご支援、ご協力のほどよろしく願い申し上げます。（安光）



鷲流狂言 in 山口県立大学（第10回）「墨塗り」の一場面